Tokusan Essay

山の特産と文化

特産エッセイ 12

（独）森林総合研究所管理官
埜田（たおだ）　宏

松竹の次は梅、梅の名勝は水戸の偕楽園。水戸といえば二代藩主徳川光圀公。白いヒゲと杖でおなじみの黄門様である。その杖の材料について考察してみよう。

アカザ

筑波山東麓の八郷町に茨城県フラワーパークがある。その正門脇の農産物直売所にはアカザで作られた杖が置かれ、いつでも購入できる。生産者は近くで観光果樹園を経営する鈴木正美さん。

アカザは古くからの帰化植物で畑の周りに生育し、若い葉は食用になる。若芽が赤くならないものをシロザというが、どちらも同じように利用される。乾燥させた茎は軽く丈夫で、年寄り向きの杖ができる。ずいぶん昔の話になるが、植物研究者の茶飲み話で、材料としての木と草の違いは何だろうということになった。爪楊枝は草でもできる、杖ができれば木だろう。アカザは杖になるから立派な木ではないか、という結論になった。

植物学的には、二次成長（茎が毎年太る）しないアカザは草本。大きさは一年で決まる。そのため、野生品で杖の素材を探すのは容易でない。鈴木さんは専用の畑で、支柱を立て、太く真っすぐに育てている。夏には十分な大きさになるが、モミジが散るころまで置き、丈夫になるのを待って収穫する。曲がったものは使えないし、皮を剥いで乾燥させ、磨きあげるまでにはけっこう手間が掛かる。

写真1　アカザの杖

黄門様の杖

水戸光圀公が諸国漫遊をしたというのは史実ではない。江戸屋敷に彰考館を置いて大日本史の編纂を始め、六十三歳で藩主を退いた後は常陸太田市の西山荘に隠居している。この隠居生活と資料収集のために各地へ人を派遣したことが合わさって物語が生まれた。

では、実際に諸国漫遊に旅立ったとしたら、どのような杖を用いたのだろうか。軽く手触りの良いアカザが最もふさわしい。テレビドラマではキッコウチクが使われている。これは、立ち回りで折れては困るということから、アカザ

アカザの杖

の使用をためらったらしい。

いうまでもなく光圀公は名君の誉れ高い。君主たるもの武器を持って相手を倒してはならない。たとえ無法者であっても、手首や急所への軽い攻撃で戦意を失わせ、改心させるのが道。このためにはアカザの杖の一突きで十分だ。

杖の材料と特性

英国風のステッキは長さが短く、手を下ろした状態で掴むため手許で曲げられている。そして、体重を支えるとき、手首には圧縮方向に力がかかる。日本で杖と呼ばれるものは一般に長く、杖にすがった状態では、手首を伸ばす方向に力がかかる。この方が手首には良いのだろうが、長く軽い材質の杖が必要になる。

一定の太さの杖を多数作る場合は太い樹木を縦割りにして作る。お遍路さんや行者が持つ金剛杖はスギやヒノキで作られ、やや重いが、かなり丈夫である。イチイガシの六尺棒は強さが取得だ。立ち番中の警察官や機動隊員が持っていることから分かるように、杖というより武器であり、年寄りが使うには重過ぎる。

材を割らずに、幹を丸ごと用いると、重さの割には丈夫で、枝や根際のふくらみが握りにちょうど良い。ホテイチクやキッコウチクの他、常緑樹林内で通直に育ったイスノキ、トキワガキなどが使える。中でも、イスノキは細くても引っ張りに強く、伐採作業で使う鳶口の柄にもされるほどである。

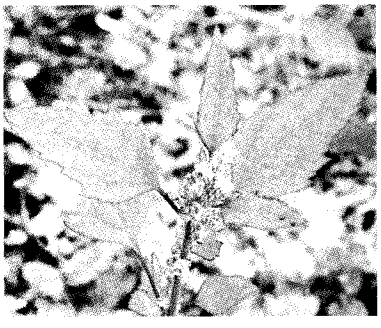

写真2　アカザの葉と花

写真3　アカザの畑

アカザの杖は毎年新調を

アカザの杖は茨城県だけでなく、山形県の三川町、広島県の三和町など、全国に産地がある。自分で作るという人も少なくない。ところで、「アカザの杖で転ぶと三年生きぬ」という。これは、杖が危険ということではなく、軽い杖ですら使用できなくなったので、十分に注意しなければならない、という意味であろう。

ただ、アカザの杖は他の材料で作ったものに比べて劣化しやすいのは事実である。だからといって、ニス塗りや補強の加工をすると、本来の特徴が失われる。そこで、杖はずっと大事に使うのでなく、一年毎に更新してはどうだろう。正月や誕生日に、両親や祖父母に新しい杖を贈る。あるいは、年を重ねた喜びと共に、自分で求める。そのような慣わしがあっても良いのではないだろうか。